



論文誌の改革を目指して

ヒューマンインタフェース学会 論文誌委員会委員長
仲谷 善雄

「ヒューマンインタフェース学会に投稿したけれど、なかなか通らないなあ」という会員の声を聞く。論文誌委員会を代表する委員長としては、何とか採択率を上げたいのは人情だが、学会としてのレベルを保つことはさらに重要だと考えている。論文は研究者にとってはもっとも重要な成果物のひとつであり、社会貢献の手段でもある。論文として掲載されることは、研究結果が当該分野の研究者から認められたということであり、採録される論文の数が増えることは、研究分野、さらには社会的に認められることになる。これを採録する側の学会から見れば、投稿された論文の査読のプロセスと結果に、研究分野として、社会に対して責任を持つということを意味する。論文誌委員会ではこのような自覚から、自らの現状を常に反省し、不十分と思われる状況については改善を図らねばならない。

現在検討している様々な改革の中で、もっとも大きなものは、論文投稿および査読プロセスの電子化である。現在の紙の郵送を中心とした投稿および査読の方法は、時間を要する、費用を要する、資源を要するという問題を抱えている。これを何とかしてすっきりさせたい。現在はこのような目標に向かって、段階的に、できるものから順次改革しているところである。

以下に昨年度から今年度にかけて実施・計画されている改善点のいくつかを列挙する。

- ①すでにメタレビュー制として、投稿された論文に適した専門分野の編集委員を担当委員と決め、その委員が査読者の選定、判定が分かれたときの最終判定の実施など、担当する論文の査読プロセスについて総合的に管理する体制を実施し、査読の迅速化、結果の信頼性向上などに努めている。メタレビュー制では、担当委員が担当論文の分野を熟知していることは当然のことながら、責任を持って査読プロセスを管理できるだけの経験と資質を持っていることが要求され、このことが投稿者の信頼感にもつながる。そこで、これまでは了解事項として運用されてきた委員の選定基準等を内規として明文化することとした。
- ②論文の電子投稿。投稿者の負荷の軽減、査読の迅速化、経費削除などを目的として、紙による投稿を全廃し、メールにて論文および必要書類を送付するものとする。提出書類についても見直す。
- ③査読プロセスの一部電子化。査読の迅速化、経費削除を目的として、これまでは査読者との各種連絡は郵便が主であったが、電子メールに一本化する。
- ④シングルブラインド制。現在は、著者と査読者は相互に匿名というダブルブラインド制だが、これを、投稿者の名前は査読者に知られるが、査読者の名前は投稿者に知らされないシングルブラインド制に移行する。これにより、査読の迅速化、査読結果の信頼性の向上などを図る。
- ⑤査読結果の「照会后判定」については、採録の条件を明確にした「条件付き採録」とし、「採録のための条件」と「コメント」の項を分けて、採択のための条件を明示することとする。

上記のうち、委員の選定基準については来年の委員選定から実施できるよう計画している。その他については来年1月より実施する方向で準備を進めている。以上のほかにも、論文賞の候補推薦に電子メールの利用を採り入れたり、「6ページを標準とする偶数頁」としていた論文の長さを「10ページ以内が望ましい」に変更している。検討中のものについては会員の皆様にその都度お知らせする。改革の進捗を見守って頂きたい。

論文誌委員会では、前年度委員会から、いくつかの改革の成果と課題と志しを引き継ぎ、少しでも前進した形で次の論文誌委員会にバトンを渡したいと知恵を絞り、行動しようとしている。私の任期も半分以上が過ぎたが、会員の皆様に誇りに思ってもらえる論文誌にすべく一層の努力をしたいと思う。